



2016年度の活動予定

これからもカンムリウミスズメを守るために繁殖地の保護区指定と繁殖個体数の増加をめざし活動を行なっていきます。

【主な活動】

- 個体数調査
- 上陸調査
- 人工巣の改良
- 観察会、講演会など普及活動
- 動画など普及ツールの作成

詳しくは下記HPをご覧ください。

<https://www.wbsj.org/nature/kisyou/sw/>

動画配信中！

カンムリウミスズメの生態や調査など保護活動の様子をYouTubeやTwitter、ブログ、Facebookで配信しています。

カンムリウミスズメが水中に潜る姿や夜間自動撮影による巣への出入りの様子など貴重な映像も盛りだくさん。

ぜひアクセスしてみてください。



● YouTube

<https://www.youtube.com/user/birdfanWBSJ>

● ブログ、Facebook、Twitter

<https://www.wbsj.org/nature/kisyou/sw/>

Strix VOL.32 特集 カンムリウミスズメ

2016年度発行の当会発行の論文誌『Strix』VOL. 32では、カンムリウミスズメを特集しています。

● 最新刊のお申し込み

日本野鳥の会 Strix 検索

E-mail: hogo@wbsj.org

FAX: 03-5436-2635

☆ジュンク堂書店池袋本店でも取り扱っています。

3,500円(税込・送料別)



カンムリウミスズメ特集 掲載論文

- ① 「ウミスズメ科の多様性」 綿貫豊
- ② 「宮崎県枇榔島で得られたカンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* の知見について」 中村豊
- ③ 「カンムリウミスズメ保全における国際協力および行政（宮崎県東臼杵郡門川町）の取り組み例」 大槻都子
- ④ 「島根県におけるカンムリウミスズメの生息状況」 佐藤仁志・森茂晃・八幡浩二・深谷治・星野由美子
- ⑤ 「カンムリウミスズメの巣への出入り時刻と個体数調査方法の検討」 田尻浩伸・手嶋洋子・佐藤智寿・山本裕
- ⑥ 「卵殻膜のDNA分析による神子元島でのカンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* の繁殖再確認」 山本裕・土田修一・小林豊

ご寄付のお願い

カンムリウミスズメなど鳥類の保護を進めるための調査研究活動や自然の大切さを伝えるための活動に役立てられます。ご寄付をしていただいた方にグッズをプレゼント。ご支援をよろしくお願いします。

【ご寄付の申し込みは会員室へ】

電話 03-5436-2630

メール kifu@wbsj.org

<http://www.wbsj.org/support/kifu/index.html#kanmuri>



GINZA TANAKA特製シルバーブローチ
1口5,000円

ピンバッジ
1口1,000円

日本野鳥の会について

当会は1934年に中西悟堂によって「野の鳥は野に」を旗印にどなたでも参加できる会員制の形で創設されました。その初心を引き継ぎながら野鳥とその生息地を守るために90の支部と会員、サポーターのご支援でさまざまな自然保護活動を行っています。生きものたちが、明日も10年後も100年後も、元気良く暮らしているように、皆さまもぜひ仲間になってください。

カンムリウミスズメ保護事業 2015年度活動報告書

公益財団法人日本野鳥の会
保全プロジェクト推進室
東京都品川区西五反田3丁目9番23号 丸和ビル
TEL 03-5436-2634 FAX 03-5436-2635

2016年9月発行

Annual Report 2015



センサーカメラ（赤外線）による無人撮影

日本野鳥の会は、1995年度から三宅島周辺に生息するカンムリウミスズメの調査を三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館を拠点に行なってきました。創立75周年を迎えた2009年度からは、カンムリウミスズメを海洋生態系保全のシンボルと位置づけて保護を進めています。7年目を迎えた2015年度も継続して生息地の保護と個体数の増加を目標に事業を行ないました。

トピックス

- 繁殖期に個体数調査を実施
- 神子元島の人工巣に新型を導入
- 地内島で捕食者調査を実施

2015年度、当事業はF氏カンムリ基金で実施いたしました。

カンムリウミスズメってどんな鳥？

🐼 カンムリウミスズメの暮らし

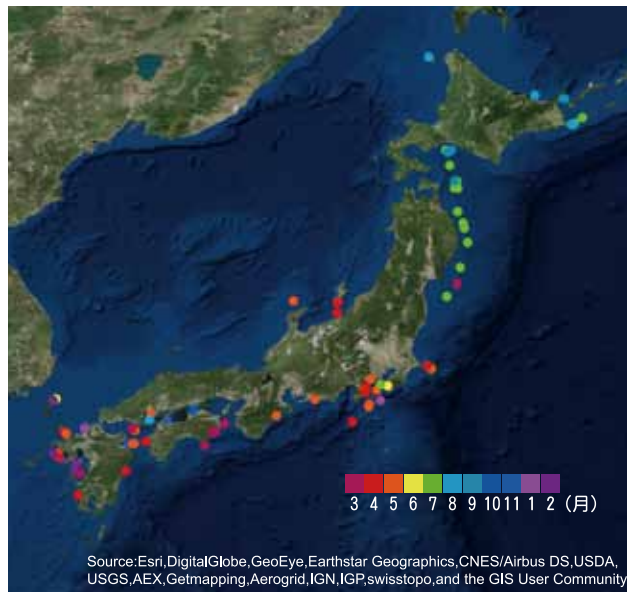
カンムリウミスズメは一年のほとんどを海で過ごします。繁殖期の一時期だけ島々に上陸して切り立った崖などに巣を構えます。岩の隙間、地面のくぼ地などに巣を作り約一ヶ月ほど卵を抱くと可愛いヒナが孵ります。ヒナは孵化すると1~2日で親と一緒に海へと旅立っていきます。最初に親からエサをもらうのは海に出てからです。



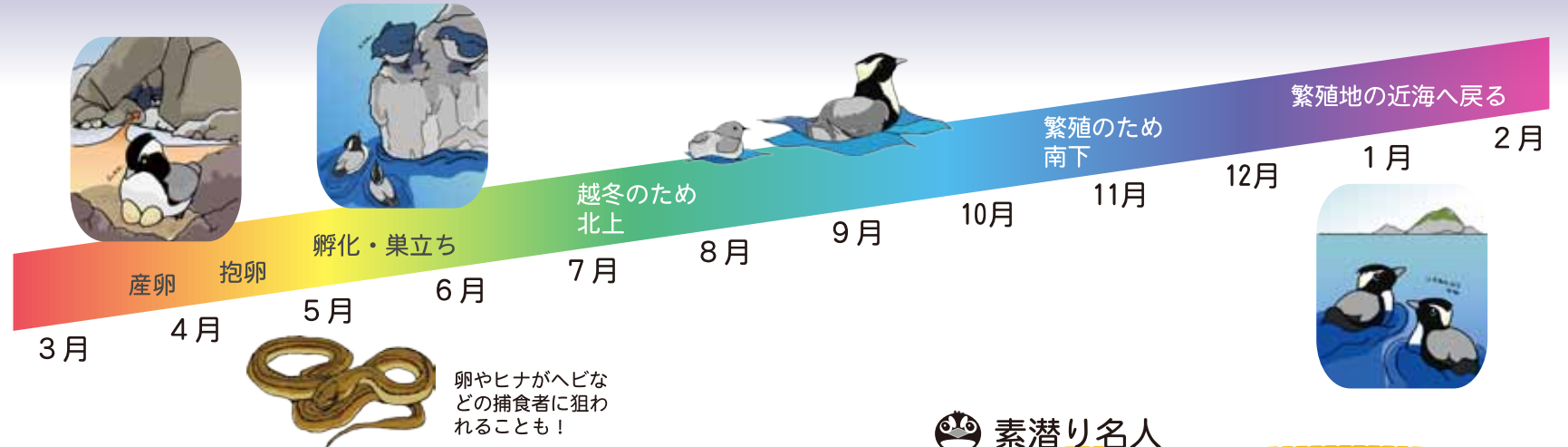
カンムリウミスズメの繁殖地 おんばせしま 恩馳島

🐼 旅するカンムリウミスズメ

海に戻ったカンムリウミスズメはヒナを育てながら徐々に北へと移動していきます。全国のみなさんからいただいた目撃情報からカンムリウミスズメが7月頃に東北地方の太平洋岸を北上し、夏から秋にかけては北海道の沿岸で過ごしていることが分かりました。さらに、冬になるとサハリン沖まで北上するものもいることが福岡、高知、宮崎県で行なわれたジオロケーターを使った調査で明らかにされました。かなりの長距離を移動しますが、カンムリウミスズメは、そのほとんどを泳いで移動していると考えられています。



カンムリウミスズメが目撃されたポイントと季節



🐼 素潜り名人

カンムリウミスズメは海に潜ってエサを捕まえます。水中でまるで飛ぶように翼を羽ばたかせて、ペンギンのように上手に泳ぎます。詳しくは分かっていませんが、小魚や軟体動物、カニの幼生などプランクトンを食べていた報告があります。



カンムリウミスズメが食べていたもの



カンムリウミスズメの個体数減少に影響を与えている主な要因

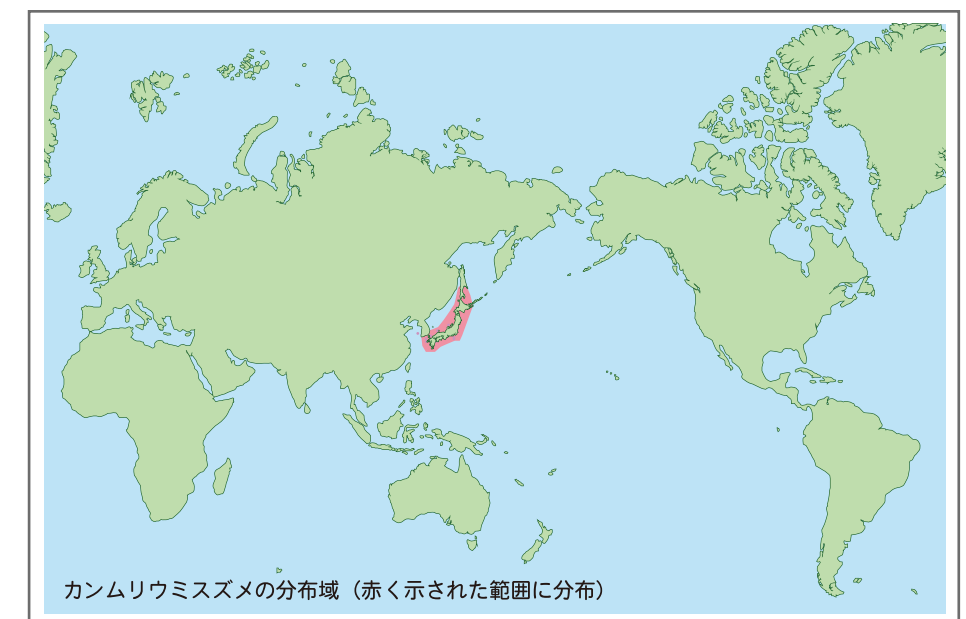
🐼 絶滅が心配される鳥

カンムリウミスズメは、推定個体数が5,000羽から10,000羽ときわめて少なく、環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類(VU)、IUCNのレッドリストでVulnerable(VU)に選定されている絶滅危惧種です。また、国の天然記念物にも指定されています。下記のこと原因となり個体数が減少してしまったと考えられています。

- ①繁殖地に釣り人が放置したゴミや撒き餌にカラス類が誘引されたり、人の移動と共にネズミ類が入り込んだりして捕食者になっています。卵やヒナだけでなく成鳥も襲われることがあります。
- ②近年の釣りブームや海洋レジャーの拡大により繁殖地に人が立ち入るようになり、卵やヒナが無造作に踏まれたり、攪乱により親鳥が巣を放棄したりといった影響が懸念されています。
- ③刺し網漁による混獲や油汚染による死亡例が報告されています。

保護事業が目指すこと

カンムリウミスズメは日本の近海にだけ分布し、繁殖も多くは日本の島嶼や離礁で行なっています。個体数が減った原因の1つ繁殖地の減少という課題を解消するには、残された繁殖地を保護区として守ることや営巣地を増やすことが必要です。当会は、この事業を通してカンムリウミスズメの繁殖地の保護区指定や営巣環境の改善を目指しています。

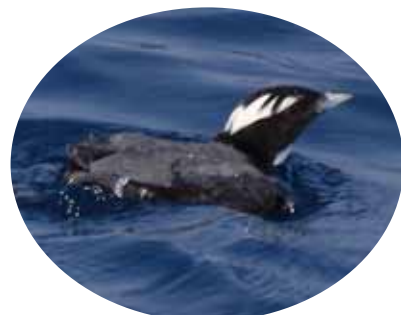


カンムリウミスズメの分布域 (赤く示された範囲に分布)

🟡 見分けてみよう

カンムリウミスズメは海にいる間に姿(羽色)が変わります。見分ける時には観察した季節や場所も参考になります。

生殖羽 (秋から初夏)



クチバシは青灰色。頭頂に黒い冠羽があります。目の前方から後頭にかけて幅広い白色部が目立ちます。

非生殖羽 (夏から秋)



クチバシは青灰色。冠羽はなくなります。顔の広い範囲が白くなり、白色部は目の前後で上へと食い込みます。



撮影：山岸洋樹

※よく似た鳥に注意！冬になると全国の海に、カンムリウミスズメによく似た『ウミスズメ』がやってきます。クチバシは淡い肉色から黄白色で基部が黒いところや喉の白い羽の広さが見分けるポイントです。



繁殖地を調べる・守る・改善する

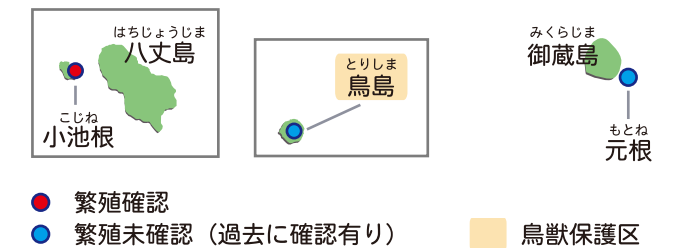
伊豆諸島はカンムリウミスズメの繁殖地として重要な海域になっています。繁殖地の保護区指定のため繁殖個体数や営巣場所の状況などを調べ、守るべき繁殖地を明らかにします。また、営巣に適した環境が少なかったり、天敵などの影響で繁殖が困難になっている島の繁殖環境の改善を目指し、捕食者の調査や人工巣の開発を行なっています。

個体数調査

新島、神津島、三宅島の属島の地内島、恩馳島、祇苗島、大野原島について個体数や繁殖の可能性を明らかにするための調査を行ないました。早朝に各島の周りを漁船で3～4周し、ライトに照らし出されたカンムリウミスズメの個体数を数えました。以前の調査や地元の方からの情報により昨年度から開始時間を夜明け前の3時頃に変更した所、今年度は地内島、恩馳島でこれまでの最大個体数を確認することができました。

調査地	調査日	最大個体数(羽)
地内島	2015/4/22	304
	2015/5/27	3
恩馳島	2015/4/23	630
	2015/5/12	347
祇苗島	2015/5/28	0
	2015/5/12	89
大野原島(※4)	2015/4/6(※1)	90
	2015/4/19(※2)	4
	2015/5/12(※3)	29

※1 三宅島自然ふれあい友の会主催、アカコッコ館協力
 ※2 アカコッコ館、三宅中学校3年生
 ※3 アカコッコ館、自然ガイドキョウルル
 ※4 大野原島の調査は日中に実施



● 繁殖確認
 ● 繁殖未確認 (過去に確認有り)
 ● 鳥獣保護区



人工巣の開発

2010年からカンムリウミスズメの繁殖数の減少に歯止めをかけるための人工巣の設置を開始し、改良を重ねてきました。しかし、2015年の繁殖シーズンも残念ながら人工巣は使ってもらえませんでした。また、人工巣の利用確認のため周囲に設置したセンサーカメラにはハシトガラスがカンムリウミスズメを捕食したり、巣になりそうな岩の隙間を覗きこむ姿が撮影されました。そこで、2016年の繁殖シーズン前の2月3日、入り口のサイズをパイプなどを利用して小さくしたり、本体部分の奥行きを変更したりとカラスの影響が小さくなるような改良を行ないました。また、他の繁殖地への展開を考え、運搬しやすい定型の人工巣の開発にも取り組み始めました。これまではコンクリート製のU字溝を使っていましたが、新たに軽量のコンテナボックスを使用した人工巣を設置しました。

第一世代の人工巣 (2010年)



第二世代の人工巣 (2014年)



U字溝をし字に割って入り口を狭くしました

第三世代の人工巣 (2016年) U字溝タイプ



コンテナボックス タイプ



カラスやネズミから繁殖地を守る

カンムリウミスズメの巣は、離島の切り立った崖の岩や積み重なった岩の隙間など、天敵が近づきにくい場所に作られます。哺乳類のように地上を歩いて移動する動物は、巣はもちろん繁殖地に近づくことすら困難です。鳥類のように飛ぶことができたとしても、本土や大きな島から離れていたり、植物が少ないような厳しい環境にある島では生息できる種類は限られます。ところが、最近ではカラス類やネズミ類などが入り込み、繁殖への影響が懸念されています。かつてのカンムリウミスズメの繁殖地では、カラス類はそう多く無かったはずで、



繁殖地の無人島(地内島)で確認されたネズミ(センサーカメラで撮影)

カンムリウミスズメを捕食するハシトガラス(センサーカメラで撮影)



ご協力をお願い!

しかし近年、釣りで使われる撒き餌の残りや残飯などがゴミとして放置され、それを餌とする多数のカラスを誘引しています。その結果、カラスによりカンムリウミスズメが捕食されやすくなってしまいました。また、ネズミ類は、自力で移動できないような距離にある繁殖地にも、船で人が上陸するときなどに一緒に上陸してしまうことがあり、やはりカンムリウミスズメの捕食者となっています。カラスと異なり、狭い隙間にも入っていけることから影響はより大きいと考えられます。どちらも私たち人間が少し配慮をすることで影響を軽減することができます。ゴミの持ち帰りや船内の清掃、上陸時の気配りなど、ぜひご協力をお願いします。

これまでの取り組み

保全	繁殖状況モニタリング調査
	2009年～ 繁殖個体数や繁殖状況に変化がないかを確認するための調査です。この調査を継続することで、繁殖状況などに変化があった時に、早期に発見し対策を講じることができます。 ▶上陸調査 カンムリウミスズメの繁殖地上陸し、繁殖の有無や巣の数、捕食者の有無などを記録 ▶洋上調査 本種が採餌のために海へ出る夜間から早朝にかけて島を周回し個体数を記録 伊豆諸島の総個体数を推定するため一斉調査を実施
	保護区指定 2009年～ 繁殖地を保護するため、鳥獣保護区などに指定されるよう働きかけています。
	非繁殖期の洋上調査 2010年～ 繁殖期後の生息地や移動経路がよく分かっていないため、非繁殖期の生息海域を調査し、保全すべき海域を明らかにします。
	人工巣の設置 2010年～ 繁殖個体数や繁殖成功率を上げるため、人工巣を設置して営巣条件を明らかにします。繁殖状況のモニタリングの際に自然巣の形状や位置などを調べ、人工巣の改良に活用します。
普及	多くの方にカンムリウミスズメの置かれている状況を知ってもらい、本種の保護のために一緒に行動できる人を増やすための活動です。繁殖地周辺に住む住民に向けて、観察会、講演会、コンサートなどを行なっています。



大野原島（三本岳）

三宅島と カムリウミスズメ

三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館には当会職員が常駐し、1993年のオープン当初から三宅島の属島の野原島で繁殖するカムリウミスズメの調査や保護活動に取り組んでいます。2000年噴火のため全島避難した後、2005年に帰島してからは、調査活動の他、地元の方への普及や観察会などの取り組みを行なっています。



島内の橋の欄干

🐼 三宅中学校との取り組み

三宅島の近海で子育てをするカムリウミスズメ。島の橋の欄干にカムリウミスズメをモチーフとしたイラストが使われたりと、その存在はよく知られています。しかし、繁殖地の野原島（三本岳）が三宅島から8kmも離れているため、実際にその姿を見た事がある人はそう多くありません。さらに、1950年代に始まった三宅島でのカムリウミスズメの保護活動の歴史を知る人も、近年少なくなってきました。そこでカムリウミスズメを取り巻く現状を伝え、保護の取り組みを次の世代につなげていくために、2年前から中学3年生を対象としたカムリウミスズメの勉強会を行なっています。勉強会はアカコッコ館の主催行事として実施し、カムリウミスズメなどの海鳥の生態や置かれている状況、三宅島での保護活動の歴史を学ぶ事前学習会と、実際に漁船に乗り込んで探す観察会を2日間に分けて行なっています。

🐼 2015年の勉強会の結果

日時：

学習会 4月18日13：45～15：00

観察会 4月19日13：40～16：20

参加者：生徒7名、教員2名

カムリウミスズメ確認数：4羽



スライドや映像を使った説明のほか、実物大のぬいぐるみを用いて洋上での観察のイメージを伝える



カムリウミスズメの繁殖地である三本岳周辺海域を中心にカムリウミスズメを探す

カムリウミスズメの現状を聞いて、カムリウミスズメだけではなく、他の鳥も大事にしたり、浜や海をきれいに保つことや、そうじをすることがすごく大切だと思いました。

生徒からの感想

カムリウミスズメだけでなく、ウヤオオミズナギドリ、カツオドリなどの他の鳥を見ることもできたし、三本岳を間近に見ることができ、不発弾の跡も見ることができて、その歴史も知ることもできて良かったです。

生徒からの感想

今回の体験でカムリウミスズメのことを沢山知り、改めて三宅島に暮らしてよかったと思いました。本当に三宅島ならではの貴重な体験だと私は思います。こうして自分達が見れたことはレンジャーさんやジャック・モイヤーさん、色々な人のおかげです。ありがとうございました。

生徒からの感想

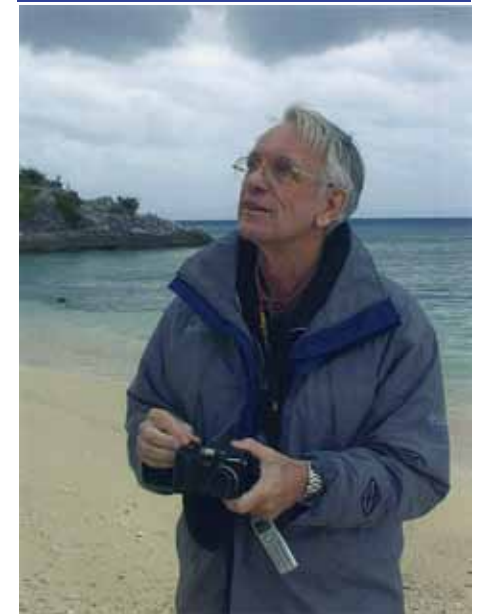
ジャック・T・モイヤー博士

1929年アメリカ合衆国カンザス州生まれ。1957年より三宅島に移住。主に海洋生物の研究や子どもたちへの環境教育活動を行い、1993年にアカコッコ館がオープンした後は環境教育顧問を務めた。2004年没。

モイヤーさんが守った鳥

カムリウミスズメの重要な繁殖地である三宅島の属島・野原島（三本岳）は、1952年頃、アメリカ空軍による朝鮮戦争の爆撃訓練の演習地として使われていました。当時、カムリウミスズメは伊豆諸島だけで繁殖をされると考えられており、ジャック・モイヤーさんはこのまま爆撃が続くとカムリウミスズメは絶滅してしまうと考えました。そこで、カムリウミスズメの窮状を訴え、演習中止を求める手紙をトルーマン大統領に送り、実際に爆撃をやめさせました。今でも三宅島でカムリウミスズメは「モイヤーさんが守った鳥」と呼ばれています。

ジャック・T・モイヤー博士



今でも残る爆撃の跡 ←

モイヤーさんが守った島でかえったヒナたち →



2015年度の活動

個体数調査	地内島	4月22日、5月27日
	恩馳島	4月23日、5月12日、5月28日
	祇苗島	5月12日、5月28日
上陸調査	地内島	9月26、27日、10月13日
	(繁殖・捕食者)	
人工巢の改良・利用確認	神子元島	6月22日、2月3日、3月25日
三宅中学校勉強会	三宅島	4月18、19日
日本鳥学会ポスター発表	兵庫県	9月18-19日